
脇役達の物語。

砂月-SATSUKI-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役達の物語。

【Nコード】

N1265J

【作者名】

砂月 - SATSUKI -

【あらすじ】

俺は「鍵使者」になった。

目立たない存在の一成がひょんなことから「鍵使者」という異世界的な力に振り回される。

そして、転校した日から、次々と不幸が一成を襲う。

果たして、一成の運命は…

「魅羽弩達のお話」にリンクする鍵使用者達のお話。

2010/6/18 改稿完了

プロローグ

「僕は守崎一成もりざきいっせいと言います。

射手座のO型、得意科目は数学と音楽、苦手科目は国語です！
これからよろしくお願いします！」

真新しく光る鏡の前で自己紹介を試してみる。

中二の12月という、微妙な時期に俺は白花町はっかちやうの白花中学校はっかに転校。

元々いた町からは町どころが、茨城から、東京へ行くんだから、仲良しのアイツら達とは、今度の冬休みまでは会えない。

ついでに、東京の中学校の授業のレベルは高い。
多分、今の成績「オール3」では、放課後、塾をハシゴして日々を終えることになるだろう。

女子の魅力もレベルアップしてるはずだが、その分恋のハードルも絶対高い。

普通の顔、『Mr・中の中』の俺なんか、相手にしてもらえるのだろうか……

何て言うことだ……。

俺は絶望に深く沈み込むようにこれも真新しいソファーに横たわった。

さて、俺の部屋は新しくなったが、新しすぎて馴染まない。

さつき、引越しを終えて部屋を掃除して見たが、殆んど塵一つも出なかった。

唯一、古い鍵が一つ、見つかっただけである。

取り敢えず、ズボンのポケットから出してみる。

見た目は極々ごく普通の小さめの鍵に見える。ただ、物凄く錆びていて、茶色の赤錆が手にも付く。

「何処の鍵なんだろう……」

俺は注意深くその鍵を見つめた。

この物語は、目立たない存在、つまり全体的に脇役の俺が「鍵使者」という異世界的な力に振り回されつつも決してどこかのゲ

―ム並みの派手な展開とは違う、そう、『日常と非日常の狭間に突き落とされた少年の日々』という話である。

第一話 最強最凶の姉貴とその弟（前書き）

あれから1ヶ月……

遅れてすいません。

という訳でよろしくお願いします。

第一話 最強最凶の姉貴とその弟

あれからしばらく見つめていたが、何も変わった所は見つけれないまま、ソファで熟睡してしまった。

「ZZZ・・・ZZZ・・・」

「コンコン」おい、一成」

父がドアを二回ノックし、勝手に入ってくる。

俺はまだその時熟睡していた。

そんな感じで爆睡中の俺を父、一郎は起こそうと顔を軽く叩く、が起きる様子は全く無かったらしい。

そしてその後の一部始終。

「困ったなあ……………」

そこへ腰までストレートの焦げ茶髪を二つ縛りにし、威風堂々と純白のパジャマ姿となった姉貴が入ってくる。

「一郎父さん」

「何だ、葉月？」

「一成まだ寝ているんでしょ
なら、私に任せて」

姉貴は笑って引き受ける。

「ありがとう、葉月」

そして、父さんはその後どんな事態が起きるのかも予測した上で、
知りながらも姉貴に任せただのである。

その後、悲劇は起きる。

姉貴は勢い良く、助走を付けて走り

ソファアの直前で踏み切った。

空中に舞う華麗なフォーム。

そして、俺の鳩尾みそおちにヒーローキックを命中させる。

「えいつー!!」

鳩尾　つまり、腹の少し上のくぼんだ所、人間の急所に、姉貴
のキックがクリティカルヒット。

着地もバツチリ決まった。

「ヴッ!!」

そして、俺は起きたのだ。悶絶と共に……

「父さん……何で姉貴にやらせたの……」

まだキックのダメージでダウン中の俺に父さんは、

「だって、起きないから困っていたんだよ。そこに葉月が来てね……」

と、他人行儀で尚且つ、平和な口調で返す。

「お願いだからせめて相手を選んでくれよ」

「すまんなあ」

父さんは目を細めて謝る。

「ちょっと……一成が悪いわよ、一郎父さん……、それと、一成。相手を選ぶってどういこと？」

そこに姉貴が割って入る。

「何だよ、姉貴」

「元々起きなかった貴方の方が悪い！」

俺はすぐさま飛び上がって言い返す。

「姉貴の起こし方の方がずーっと悪いだろ！」

姉貴の容赦無き平手打ちが入る

「バチッ」

思わず左頬を押さえる。

「痛っ……このっ、暴力姉貴が」

そう言うと、姉貴はにつこりと笑って、

「男はね本来口より力の方が強いはずなのよ」

その直後、会心の回し蹴りが顔にめり込んだ。

「バシッ！」

ソファーに倒れ込む。そこには痛みを訴える隙さえ無かった完璧な一撃があった。

そして、俺は鼻血を出して気絶

「やばっ！また眠らせちゃったよ……」

ちなみに最後に聞いた言葉は、姉貴の心配する言葉だった。

俺ではなく、自分自身が怒られることについての……

その日、久しぶりに4人揃って夕食にすることが出来た。

母、一美が微笑みながら嬉しそうに言う。

「もう一年ぶりだね、葉月〜」

「はい、一美母さん」

俺は久しぶりに姉貴の右隣で、夕食のエビフライを食べる。

「……………」
（まったく、ふざけるんじゃないやねえよ…………）

俺の家族はいわゆる、音楽一家である。

父は男ながらフルートを吹き、今回東京の某有名オーケストラに配属されたため、引っ越すことになった。

母は主にエレキギターやエレキベースを奏く。

家では母親らしいが、週一、二のライブ活動では男前になるのである。おもいつきりロック系。

俺はクラリネット専攻である。

前にいた茨城の中学校では吹奏楽部の一員として活躍した。

今では、東京に引越したのでそれも自慢ではなくなってしまったが……

そして姉貴。

五つ違いで今年度十九になった姉貴は、父の影響により、小五の頃にしてフルートを始めた。

しかし、実力は桁違いである。

去年の某国際コンクールで、最優秀賞を獲る程才能があるのである。

テレビにも出た位である。

お陰で、こっちは「葉月さんの弟」と何度言われたことが……屈辱だ。

そして今はフルート専攻で東京の某音大に通っている。

だから、つい半年前辺りから、一人暮らしを始めていたのだが……

今回、東京へと引越すことになり、また最強最凶の姉貴と一緒に暮らすことになったのだ。

第一話 最強最凶の姉貴とその弟（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

第二話 弟としての立場（前書き）

こんにちは。何か久しぶりですね。すいません……一応これでも次回からはちゃんと少しずつ本筋に入れます！なので、今回もよろしくお願いします！

第二話 弟としての立場

「じゃ、余っているみたいだから最後の一本貰うね!」

葉月姉貴はそう言い、大皿に乗った最後のエビフライを取った。

「うん?」

俺はその様子を味噌汁を吸いながら横目で見届ける。何か、

おかしいような気がする……。

……………ちよい待ちっ!

本日のエビフライは大皿に八本乗っている。

普通は一人二本ずつ、と言う所だが、俺はまだ一本しか喰って無い。

その証拠に目の前の赤い尻尾(残り)が俺しか一セットしか無いのである。

にもかかわらずにだっ!今姉貴は何をっ……………!

「くく」
俺を騙してエビフライをお!!

現行犯逮捕だああ!

それと、人質(俺の分つ、エビフライ!)を直ちに保護せよ!

「姉貴!それ俺のたあつ!!」

俺の黒い箸は、見事、姉貴の口へ運ばれようとしていたエビフライの尻尾を掴む。

「ガシツ!!?!?」

ナイスだ!俺の箸達よ!

「ちよつとく、何横取りするの!一成いっせい!!」

「おいっ!その一本は俺のだよ!横取りは姉貴の方だろ!!」

二つの黒い光を放つ漆塗りの箸達是一对を為して、ただ最後一本のエビフライをそれぞれの端で取り合っていた。

「ぬぬぬうくく!!」

力は殆んど互角である。

周りを囲む皿達がかたかたと音を立てる、二人共、かなり強い力をエビフライに向けていることはお分り頂けるだろうか。

このままじゃ、埒らちが開かねえ……。

そう判断した俺は奥の手を使うことにした。

「一成、そろそろ、それを離しなさい！今回は諦めるのよ！」

「違つよ！横取りは姉貴の方だ！その証拠にほら、俺の皿を見る」

「はああ？何よ、尻尾の数が一つしか無い事で勝ち誇って……」

そう言いながらも、やはり、罪悪感が有ったために姉貴は一瞬、エビフライから皿へ視線を移す。

今だっ！

「『バシッ』」

「あつ！！エビフライが！」

目線を外した姉貴は、一瞬力を緩めた。

俺はそれを見逃さない。

狙い通りだ、エビフライを姉貴から引き剥がすことは成功した。

「あつ！！エビフライが！」

「うおっ！」

宙をバク転するかの如く、綺麗な放物線を描きエビフライは真ん中の大皿へと飛んでいく。

『ヒュン……ヒュン……ヒュン……』 『バシッ！』 『』

キャッチ成功！

この瞬間、俺は右手を伸ばし、ギリギリの所でエビフライを掴んだのだった。

今まで一度も姉貴に勝ったことの無かった俺はガッツポーズしながら叫んだ。

「よっしゃあー！！」

しかし、喜びを感じているのも束の間だった。

「……一成。今の行儀は何ですか？」

「はいつ？」

ふと右斜め前方を見ると、そこには不気味に笑っている母さんがいました。

……………何だ？この不穏な空気

「あっ」

よく見ると顔には茶色いソースが掛かっています。多分、さっきの戦いでエビフライが宙を舞った時に付いたんだろっね。だって姉貴が直前にソースをベツタリと付けていたんだから。

よくもそこでソースが掛かるなんて……ある意味器用過ぎる人だ

そして、横に鼻の辺りを斬られたかのようにソースが掛かった母の顔は赤鬼のようになっていました。

茶色いショートカットも今では鬼がしているあの天然パーマにか見えません。

……何か、俺だけにターゲットしている？姉貴だって同罪だよ？
ねえ？

「一成っ！」

ぎゃああー！！母の咆哮が俺に来たあー！！

回避だ！回避っ！！

「何で俺だけなんだよ！母さん！元々姉貴がソースを余分に付けたからこんなことになったんだろ」

「いや、貴方が飛ばしたから、こんなことになったんですっ！」

「それは姉貴が無理矢理取っ……それは口で言えば済むこと」「

それで済んでいたら、俺だってこんなことして無いって……！」

「姉貴が先にしたんだって！」

「葉月がそんなことするわけ無いでしょ！」

何だよ！その『長女はちゃんとしています』と言う格言はっ
！…少しは俺の立場にもなれ！

「違っつて……！」

そうして俺が反論しようとした時に決着は付いた。

「『バチッ！』まずは反省しなさいよ……！」

母が突然接近、俺の左頬に平手打ちをした。

さっき、姉貴にやられた場所と同じ箇所を打たれたのである。

「……………」

余りの痛さに涙が滲んでくる。

「やっと分かった？」

何を勘違いしたのか、母は勝ち誇った様子で言った。

しかし、俺はもう反論する気力も何もかも残って無かった……。

「じゃあ、これは私が」

横目でその様子を見届けた姉貴は、最後のエビフライを、これもまた優雅に取って行った。

何で、いつもこんなことになるんだよ……

弟として生まれてきたことに、俺はまた憎んだのだった……。

第二話 弟としての立場（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

次回からはちゃんとファンタジーっぽくしますのでこれからもよろしく願います！

第三話 一時の平和な時間（前書き）

どうも、お久しぶりです。今回は色々本編とリンク出来たと思います。

こんな作品ですが、今回もよろしくお願いします。

第三話 一時の平和な時間

「……ったく！何で姉貴が帰ってくるんだよ！」

『シャア……………』

熱めのシャワーで髪や体に付いたシャンプーやらボディソープの泡を洗い流す。

ああこのシャワーのシーンってさ、イケメンがしたら、女子が『きゃー！』とか言うけどさ、実質的には男の体を見るだけだろああなんかイラつくっ！ってか、何で俺こんなこと言っているんだ元々姉貴に対して苛立っているというのに

「……………熱っ！」

的外れなことを考えていた俺の気が正気に戻ると途端、いきなりシャワーの熱さが説教するのか如く襲い掛かってきた。

「あぢちちっ！水、水っ！」

慌てて温水の蛇口を締め、冷水の蛇口を出す。時間差で丁度良い温度になったのも束の間、一瞬にして冬の寒気で冷たくなった冷水が体に掛かる。

「冷たっ！なんだよこいつっ！」

体が冷えるっ、シャワーに文句を言いつつ、やっとのことで湯船に浸かった。

「ふうっ……」

やっぱり、湯船に浸かるのは気持ち良いものである。ふう、今日一日でやっと、平和な時間が訪れたような……だって、午前中は引越やら転校先の中学へ挨拶して面倒だったし、その後爆睡してたら、姉貴にヒーローキック！で軽く半殺しされ、お疲れ様でした自分。

顔の半分まで熱めの湯船に埋めて浸かっていると、さすがに体が温まり過ぎで気持ち悪くなった。横の窓を開ける。

『ガラッ……』

冷たい夜風がそっと顔を優しく撫でる。

一成の新居は珍しく風呂が二階にあり、広い夜空と住宅街が一望出来る。

空には満月が輝いている。その下には、少年が一人、道の真ん中で佇たたずんでんでいる。

『フッフ』

歳は14、15だろうか、少年は月に向かって微笑んでいた。だが、その身体は半透明で月の光を透かしている。

「気持ち悪っ……………」

その顔を見た瞬間、背筋に悪寒が走った。

しかし、その理由には普通の人とは少し違うニュアンスが含まれている。何故なら、俺は幽霊を、見慣れているから。

俺には、生まれつき『靈感』が備わっていた。

それに気付いたのは、確か……………幼稚園の頃だ。じいちゃんが死んで葬式に行った時、遺影の下、棺桶の上で胡坐あぐらを掻かいていたっけ。「じいちゃん、何でそこに座まつてんの？」と言ったら親戚一同が真っ青になって大騒動になった記憶がある。

それからと言うものの、俺自身はあちこちで幽霊を見掛けるが、大概はこちらから話し掛けなければ大丈夫だった。なので、特に気にすることは無かった。

「コツツ、コツツ……………」

不気味な少年に近づく靴の足音が夜空に響く。

「誰だ？」

その音に一成は首を傾げた。

「？」

少年もその音の方向に顔を向けていた。どうやら、その不審そうに警戒している表情から、足音の主は第三者なのだろう。

「コツツ……………」

間もなく少年に近づいた第三者の姿は月の光に照らされた。

一成から見ると、丁度影の方向でシルエットしか見えない。が、少年と比べると背が小さく小学生位の男子のように見える。

「……………だな」

「……………！」

その第三者が、少年に詰め寄り何かを確認するかのようにつづ。一成からの距離だと何を言ったのかは聞き取れないが、少年の顔が青ざめていくことから彼が少年に脅しを掛けていることが分かる。

「……………っ！」

「待てっつっ！」

間もなく、少年は第三者の方向とは逆に走り出し、少年と第三者の幼い男との逃走劇が始まった。

「……………ああ！？」

しかし、俺にとつてその逃走劇は信じがたい光景だった。第一、幽霊を人間が追い掛けているなんてどんなシチュエーションだよ？しかも何かめっちゃくちゃ二人とも空飛んでるし！

追跡者の妙に正義感な声が空に響く。

「おりゃああ！」

そう、その二人は一成の目からも確認できる。明らかに、家よりも高く跳んでいたのである。幽霊ならともかく、人間で5、6mも跳ぶなんて……………んな訳、あり得ないって

「あ……『ビュッ!』」
そう考えているうちに二人の姿は消えてしまい、程なくして突風が入ってきた。

「寒っ!」

窓を締め、再び顔の半分まで、浸かった一成は一連の出来事を幻影だと思ふことにして眠りに着いた。

……一方、その頃。

「お前、魅羽^{メン}弩^ナだな」

「……っ!」

カイ と言われている少年は感付いたのか逃げ出した。

「待てっっ!」

やっぱり、嬢ちゃんの言ってた通り魅羽弩^{メンナ}だな。

我龍^{がりゆう}はまた今日も使命を果たすべく、暴徒化した魅羽弩^{メンナ}を追い掛ける。

今日の相手は珍しく幽霊だが、まだ初期状態ならば楽勝なはず。

「トラン、準備っ！『はい！』」

少年に向けて衝撃波を打ち込む

「おりやあ！」

『バシユ！』

「殺ったか……！」

衝撃波により、風の刃と化した空気は見事に少年を包み込むように切り割いていった

黒い影が一つ公園に墜ちて行く

我龍は一応確認のため公園へと向かった。

「……？おかしいなあ……」

墜ちたはずの少年の姿が無い……

「我龍様っ！」

「なん……『バシツ！』」

我龍は後ろからの奇襲攻撃を右で弾いた。身体には能力によって基本的抵抗力が備わっているものの、痛みが走る。

「……………ヒカリ」

「我龍、また会ったね」

後ろを振り返ると髪にメッシュを入れた女子高生一人が居た。

その不良そうな女子高生の口が開く。

「何でアンタはいつも私の邪魔をしてくれるんだか」

「それはこっちの台詞だ」

口ではそう言ってるが、我龍自身は数年前のある思いに刈られ、内心の動揺が動きを一瞬遅らせる。

次の一瞬、公園は強烈な閃光に染められる。

第三話 一時の平和な時間（後書き）

後半部分の我龍君は本編にも登場しておりますので、どうぞ本編もよろしく願います。

やっと、本筋に入ったかな……。

でもこっちが11月で今4月ってどうしましょう……

（……）

第四話 初コンタクト(?) (前書き)

いつも通り更新が遅い作者でございます

(;)

そして何故か深夜に更新

第四話 初コンタクト(?)

???? | Side

「…………グウウ…………グウウ…………。」

……………

うーん…………。

……………うっさいなあ。

『ふわあぁ〜……………』

せつかく、人が気持ち良く寝ていたというのに、こっぴの音おとごときめに目を醒さまされる羽目はねめになるなんて全く最低だ…………。

もう何年ぶりに覚醒さすことになるのだろうか、もう少し寝ていたかったがこうして起きてしまったからにはそうは行かない……………ってか、ここはどこだ？

「グウウ…………グウウ…………。」

『ふむ…………。』

周りは白い壁と大きな窓、浴槽とシャワーがある。　　いわゆる風呂だな…………。でも、こんな所で私は寝ていたのか？いや、覚えていない。ということとは…………

『こいつか？』

依然として、鼻を掻きながら爆睡している少年を見上げてみる。私はその少年の手の中に握られている状態である。いや、正確にはこいつが私を持っていったのでは無く、私がこの少年の【想像】に吸い寄せられてくっついていている訳なのだが…………本当にこいつが？

『私を呼んだのか？』

呼び掛けてみるが、少年は依然として寝ている。あり得ない……
本当にこいつが私を覚醒めさせた……？私は滅多には起きることが
無い。それ相応に大きな【想像】を感じないと覚醒る訳ないのだが
……まあ良い。居ないよりはましだからな。……面倒臭いが一応挨
拶したら寝れば良い。ま、きつと何か勘違いで起きてしまったのだ、
こいつが私を覚醒した……いや、喚べる筈など無いな。

……きつと、何かの手違いだ。

守崎一成「Side」

『おい起きろ。』

なんだろ……？なんかこえがきこえる。

『聞こえているか？』

……あねきのこえ？ってか夢の中にまで出て来るってやめて
ほしいマジで俺を殺す気か

目を開けても暗闇が広がっているそれを確認した俺は、今、此処
が夢の世界である事、そして今、俺は夢の中に在るんだと再確認。

その事を踏まえつつ、さっきの声に返事をしてみる。

「ああ、聞こえているが、此処は俺の夢の中だ。姉貴ならとっと出ていけ！」

相手の姿は出て来ないが、しかし、必死に笑いを抑えている声はちゃんと聞こえてくる。ってか、笑うなよ。お前は誰だよっ！

『（クスツ）……安心しろ。私はお前の姉貴では無いからのお。』

「じゃお前は誰だよ！勝手に俺を夢の中に起こすなよっ！」

『それはこっちの台詞だ。勝手に私を拾い上げるとはのう……お蔭で久しぶりに目覚めたではないか……目覚めたからには、一応お前に挨拶して置かねばならぬのだ』

「だからお前は誰なんだよ！俺を此処に呼び出っ……？！まさか」

俺が『拾い上げた』だと？待てよ、まさか、今、俺が話しかけている【お前】ってまさかっ！

「まさかっ」

『おっ？気付いたのう？』「！！……って、やっぱり誰？」

『……………』

姿こそ見えないが、確かな感覚で凍り付いた場を感じとったね。

うん、何だろうね？この空気。

『……………取り敢えず、一度死んで』

「ええっ……！」

何！この死亡フラグって！守崎一成、14歳、まだ死にたくない！

『（バンッ……）』

「ゲハア！」

鳩尾みぞおちに衝撃が走り、その場に倒れ込む……ああ俺はここで死ぬのか『馬鹿！』

ええええつつ？！いつ、今何が『何を驚いとる！』勝手に俺の思考に入つとるうう！『ああ、その事か。』何だコイツ？！普通『』の後の言葉はな、その人が『』ってか？『うわっ！使うなあ！！今、此処は俺の台詞しか入れちゃ駄目なはずなんだよお！

『ちゃんと人の話を聞け！』

『（グイッ）』

「イダダツ痛いつ！」

「首を掴まれ持ち上げられる苦しい。姿は見えないが、きつとコイツはチンピラだ……ってえ！何で『』の台詞が会話文にいい！！」

『お前がそうやって『語る』と話が進まないんじゃ、本題に入る』

「ごらああ！勝手に『』を普通の会話文にするなあ！表現の自由はどこに行ったあ！」

その瞬間、全体に殺気が満ちたことを俺は忘れることは無かった

『表現の自由を奪われたのは私の方じゃ。勝手に『語り』で話を長くしておって……何なら、今からお前の台詞、言わば、お前自身の『存在』を消すことだって私には出来るんだぞ』

「んっ！……………！！」

『ちなみに次反抗したら……………』も無くすぞ』

「！」
『！』もな！』

その後、しばらく長い間俺は、表現の自由を奪われ姿の見えない『アイツ』に話の主導権を握られることとなった。ちなみにまだ首を掴まれ絞められている状態で。

『で、もう一回聞くが本当に私の正体が分からない？』

「はい、分かりません。つてか、苦しいです」

『早すぎる！もう少し考え！』

「だから分かりませんつて。それとさっきから俺苦しいんです、首離して」

『思い出せないのか』

「それよりも首離してくれないと死にますから」

『思い出されなければ、もう一回するが良いかのう』

んなこと、言われても……『拾い上げた』つて……！

あ。

まさに今答えが喉から出掛かっていようとした時。

『もういい』

「えっ？つてか死にます」

『もつこれでおしまいだ』

「ちょ、ちょっと考えさせといて何ですか！急に」

『じゃ、最後に』

「いや、勝手に進めないで下さいよ！」

『うるさい。黙れ』

「ちょっと分からないことがあるのに！」

『だ・ま・れ』

「じゃああなたの正体を教えて下さいって！ってか急に來て何が目的で俺を」

『それ以上言ったら再びさっきのような事をするぞ』

「ひい！……わ、分かりましたからせめて首離して」

『取り敢えず力が欲しいのなら』

「そのままスルーするの止めて下さい……うう苦しい」

『取り敢えずスルーだな……じゃなくて！力が欲しいのなら』

「だっ、だから離して！マジ死」

『分かったが、すでに話しているではないか最後まで話を聞く！』

「そっちじゃ……な……いつて」

『汝、力が欲しいのなら、ちゃんと『私』と共にしろ、以上！』

「ええっ……ちょ、待てよ……」

その瞬間、首が完全に絞まり、その言葉を最後に俺は夢から気を失ったのだった。

「ゆめ……？……！ブハッ！！」

夢から覚めた時、水中に沈んでいた俺は大量の水を飲み込んで、危うく溺死で死ぬ所だった。

「ガハッ！……マジで死亡フラグ立つ所じゃ『ゴンッ！』又ハッ」
いきなりの鈍い衝撃。そして、もう一度水中に沈む俺。

「何時まで風呂入っているの！」

犯人はもちろん俺の姉貴です。どうやら石鹸を投げたら頭に無事
ヒットしたそうで。お陰様でマジ死亡フラグ立つ所つすよ。これ、
絶対犯罪行為つすよ。殺人罪。

取り敢えず一度死にかけた後、絶対王政の姉貴に謝りそそくさと
風呂場を後にした時だった。

あいつの正体が分かったのだ。

「ああっ！」

何て云うことだ……俺の右手、その手のひらには掃除の時に手に
入れた筈の茶色く錆びた鍵がへばり付いていたのだった。

「お前かよ」

俺はどうやら取り憑かれてしまったらしい。

その時は自身の靈感体質にただ嘆くことしか出来なかったのだっ
た……。

第四話 初コンタクト(?) (後書き)

今回も最後まで読んで下さってくれた方々、ありがとうございます。

m () m

そういえば、魅羽弩達の物語とリンクしているんだけど、どうなんだろうか……。

第五話 初登校にて（前書き）

どうも、久しぶりです。

えっと本編が今、改稿中なので勢いでこちらも改稿いたしました！

なので所々台詞がカットされたりされてありますが、ご協力お願いします。

第五話 初登校にて

結局、右手に錆びた鍵を引っ付けたまま一晩過ごしたが、翌日、目を覚ますとそいつは既に跡形も無く消えている。

「……………無い……………！」

おお！消えているではないかっ！

やはりあれは夢だったのだろう……………きっと、そうに違いない。錆びた鍵は何処を見ても見当たらない。そうか、さすがに鍵が取り憑きで心霊現象なんてマジであり得ないんだって！

「ゴゴンッ」こらっ、起きなさい〜〜！！

直後に鈍い衝撃音……………頭に激痛の余韻を残した。

「痛ってえ……！」

そこには黒のリクルートスーツを着込んだ葉月姉貴が居た。仁王立ちの姿勢は今も昔も変わらない。

「痛つ……………、こっちはもう起きているんだけど」「あらっ、そうだったの。あっ、目覚まし時計ありがとうね」

どうやらさつきは目覚まし時計を投げつけてくれたらしい。赤い丸の本体に、二つのベルが付いたテンプレの型だ。人のモノを勝手に借りる所もやはり変わっていない。

にしても……………。

「何で今日は黒のスーツなんだ？髪型もそのままだし」

「今日はちよっとこれしか着る服が無いのよ、それに色々と用事もあるし」

「ヤクザの人に見えるんだけど」

瞬間、回し蹴りが顔面に入ったがいつもの事なので、音は省略。

「少しは加減出来ないのかよ……痛っ、だから姉貴は凶……」
「その『きょう』は何と言う漢字かしら？もし凶暴の『凶』だったら今すぐにも半殺しするけど」

「いや誤解っ！誤解ってば今日は12月1日の『今日』ですって……今日から俺は転校生なんだから」

そう言いつつ、目覚まし時計の時刻を確認。えっーと、今は8時15分だから、遅刻だな、っておいつ！！マジかよっ初日からあ？！

「うおおー！！」

「遅刻確定ね。」

いきなりの遅刻だあっ！ 慌てる俺に、姉貴は何かを投げ込んできた。

「ほれっ」

「「パシッ」ん？何も無いんですけど」

「あっ、とりあえず気持ちだけでいいかなと……。」

……仕草をしたただけだ。

「普通、忘れ物を投げ渡す所だろそこっ！紛らわしいことするな！」

「馬鹿、気持ちも忘れ物に入るわよ、だから遅刻するのよ」

「じゃ、せめておにぎりとか渡してくれよ！」

俺の文句に姉貴は勝ち誇った悪魔のような笑みを浮かべる。

「くくっ、運が悪いわね。今日の朝食はカルボナーラよ、それでも走りながら食べるつもり？」

このっ！よりによって麺類があっ！！

「あああっ！！もういつ！！朝食抜きで行ってやるっ！」

乱暴にワイシャツと緑色のブレザーを手に取り、素早く着替えて行く。

「ほれ、下も履く！」

「「パンツ」痛っ、ベルトも投げるなよっ！」

顔面に一瞬、鞭と化したベルトが鋭く当たって、焼かれるように痛みが駆ける。が、今はそんな事に突っ込んでいる暇は無い。

姉貴が投げた黒革のベルトと、チェック柄のズボン。最後に深緑色のネクタイを締めて、鏡で姿をちらっと確認して……。

「じゃ行ってきますっ！」

二階の部屋から駆け降り、玄関のドアを勢い良く開ける。外にはもう陽気な陽射しが辺りに注がれている。

「いつてら」

姉貴はその様子を微笑みながら見送った、ような気がした。

「ああもっつ！」

校門の前で俺は叫んだ。門限を過ぎた所為なのか、堅く閉じら

れている。

「クソがあつ！」

門を叩いてみる。が、門は開くどころか人影一つさえ現れる様子は無い。

今時、珍しいタイプの校門だ。黒い鉄格子で2mは超える高さの扉を形取り、観音開きに開くタイプらしい。巖かに佇たたずんでいる姿は、魔法使い（悪そうな奴）が住んでいそう城を連想させる。

よし、こうなれば……

「テイヤア！「ゴーン……」！」

やはり、姉貴の水平飛び蹴りを真似たのはまずかった。

扉に向かつて水平になった俺の蹴りなんてそう通るはずも無く、そのまま出した右足を痛め全身をコンクリートに打ったのである。

特に顔面は、ベルトのダメージから上乗せされた分、凄まじい痛みを感じる。

「痛つてえ……！！！」

斯くして、そう俺が悶絶しコンクリの地面に倒れていた頃か。

「「ガチャン」おいつ、そのつ、お前大丈夫か！」

あんなに頑固なはずの扉が呆気なく開かれたのである。

「あつ、すいません……」

さっきの音を聞き付けた教師が来たのだろう、と思ったその先には、

「あちゃー、顔赤くなってるな」

「ええっ……！」

何とも、同じ制服を来た男　背が低いので多分一年か　が、ただ一人、そこに立っていたではないか。

他には誰もいない。そんなあ！コイツがあんな扉を開けたのか！？

「あ、」

《驚愕！》を顔に表した俺に、そのチビ、は気付いたのか、慰めるように言う。

「ああ、……えっと初めてかな、この扉、コツがつかめないと開かないから」

「えっ」

「まあ、ドンマイ。それより早く教室行かないと」

そう言うてチビは右手を俺の前に差し出す。馴れ馴れしい奴だ、口元が綻んでいる。多分、年下のくせに。

「ああ、確かに行かなきゃね」

心ではもう十回以上野次を飛ばすが、今は教室に行かなければ、と思うとこんな年下でも案内して貰わなければならない。

「あ、あのさ、職員室まで案内してくれないか？」

本当は命令口調で言いたい所だが、仕方がない。

「いいけど、何で？」

そう言うチビはもう既に昇降口の中へと入っている。

速っ！、と思いつつ、声だけは清々しいチビの後を仕方がなく、

俺は付いて行くのだった。

第五話 初登校にて（後書き）

今回も最後まで読んで頂きありがとうございます。次からは学校編です。

第六話 第一生徒発見、だが……（前書き）

今回は短めです。

第六話 第一生徒発見、だが……

「えっと、職員室は向こう……。特別棟の一階だから」
チビはそういう間にも関わらず奥へと、陽射しが差し込む廊下を歩いていく。

「ちよつと待てっ、まだ俺慣れてない、ってか初めてだから」

その言葉に反応し、チビは立ち止まってこちらに振り向く。その顔には『好奇心』の文字が大きく出ている。

「……と言つことは転校生？」

「まあ、そういうことです……」

本館と特別棟の間にも長い廊下が続くが、壁が一切無いので外の中庭にすぐ出ることが出来るようだ、テニスコートが三面もある。

新品同様のベンチもあり昼休みに昼寝もしやすそう……。

「ねえ、どこから来たん？」

「茨城県から来た」

「ああ、納豆の所かあ！……んで何で転校して来たん？」

「……えっ、と」

親父がオーケストラに入って、と言ったらこいつ、どういふ目で見るんだろつな……。まあ、「仕事の都合上」と言えばいいか……

「あ、まさか人に言えない事情？……例えば『人間関係』とか」

いじめられたから転校か、って勝手に人のキャラを決めるなよっ！

「違つよ、仕事の都合上」

再びチビに目を向けると既に哀れみの目で俺を見ていた。

「そうか、こつというねえ……。あるよなあ」

ますます哀れみを見せるチビ。おいつ、何か勘違いしてないか？俺、そこまで可哀想な人じゃないぞ、……。確かに、姉貴に関してはそうなんだけど。

と妙な空気が二人を包みこんでいるうちに特別棟の奥、職員室前へと着く。

「ここが職員室だよ」

「……あ、もう着いたの？」

チビは、うんっ、と気持ち良い声で頷くとじゃあ。と言い、颯爽と走り去っていった……。

「あっ、ちよっ待てよ……。」

せめて最後ぐらい何か一言言わないのか……例えば、謝罪の言葉とか。

そんな思いで後ろ姿を見送ると一瞬、期待通りチビは振り返り大声で

「大丈夫、いざというときは俺が味方になってやる！」

……もうなんかいじめられっ子キャラ確定されてるし。

そして、今度こそ颯爽と去っていく人影……髪が光に当たり群青に鈍く輝く……って、何気に校則違反じゃねえか。その姿を呆然と見送った。

全く姿といい、正義感が溢れる口調、の割には生意気な、ビックマウスと云うべきか。……アイツは中二病の 特に『少年マンガの主人公病』の患者か。

「まあ、現実だからもう会わねえだろうな……たぶん」

心の中で呟くと、丁度良くドアが開き、そこから先生に案内されるのだった。

教室のドアが開くまでの間は、順調だった。しかし、今では挨拶という台詞も、新しい担任の名も何もかも思い出せなかった。

別に姉貴の攻撃による後遺症では無い。

また、校門での顔面衝突によるダメージでも無い。

また、何気に女子からの目線が痛々しい訳じゃない。

あるいは、「国語の授業が潰れたぞ！」と云う俺の影の薄さでは無い。

……ただ現実がとても残酷な物であったと云うだけの話。

「(よっ)」

誰も居ない空席の横に、アイツ　チビが居たのだ。俺が間違えて一年の教室に入った訳では無いし、その逆でも無かった。

彼の左胸には二年を示す赤字のプレートに『黒屋我龍』の白字が書かれている。

第六話 第一生徒発見、だが……（後書き）

毎度読んで頂きありがとうございます！

まあ、次回で主人公をさんざんいじってからそろそろ本筋に入ろうかな。と思います。

我龍君はしばらくベタなキャラしてもらいますが、どうか皆さん温かく見守ってやって下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1265j/>

脇役達の物語。

2010年10月8日22時31分発行